

情報処理技術が牽引する 明るい未来

—会長就任にあたって—

富田達夫 情報処理学会会長／(株)富士通研究所



今、社会は大きな変革点を迎えていて、産業界も、研究教育機関も、自らの変革を強く求められています。本会も、喜連川前会長の強いリーダーシップのもと、学会価値の向上や社会の役に立つ学会を目指して中長期の施策を手掛けるとともに、短期的にもあらゆる手段で会員増を目指し、変革を推進されてこられました。このたび、喜連川前会長の後を継いで、第28代の会長に就任することになりましたが、これまでの変革への足取りをとどまらせることなく進めていくことが私の責任と認識しております。

取り巻く環境

情報処理技術の急激な普及に伴い、誰もがインターネットを通じて世界中の情報に瞬時に接することができるようになりました。世界の距離は縮まり、世界中で起きるさまざまな社会問題が、遠い世界にも影響を与え、単なる「他所の問題」では済ませられなくなっています。常にグローバルな視点で、価値観の異なる多種多様な人々がいることを前提に、問題に取り組むことが求められてきています。地球環境も、私たちが進めた文明の急激な発展の影響も含めて、変化の速度を上げています。時には大きな災害を引き起こして私たちの暮らしを襲ってきています。

情報処理技術の進展により、個人は手にスマートフォンを持ち、多くの人と繋がりをもちながら、新しい情報をいち早く手にすることもできるようになりました。

が、一方で、人から「ものを考える時間」を奪っているのではないかという見方もされています。スマホ中毒の人々を生み出し、過多の情報、風評被害、あるいはソーシャルメディアやブログの炎上といった社会現象を生み出してきているのも事実です。

産業界は情報処理技術を用いて効率化を進めコストダウンにより競争力を得てきましたが、グローバル化する競争環境の中で、情報処理技術による新たな価値創造により自らのビジネスを変革しなければならぬと感じてきています。

研究機関、教育、大学の在り方が、社会とのかかわりの中で問われ、これまでの延長線上での研究活動や教育ではもはや立ち行かない状況になりつつあります。自らの強い意思で変革していくことが求められてきています。

このように私たちを取り巻く環境は待ったなしに各自の変革を要請しています。情報処理技術が自身の進展がもたらした課題も含め、さらにその技術を高めて、解決への大きな役割を担っていく必要があると考えます。

情報処理技術への期待

インターネットにより世界が繋がりが、クラウドによってコンピュータパワーが簡単に手に入るようになりました。映像技術や通信技術の進展により動画が簡単に流通できるようになり、今後はIoT (Internet of Things) と呼ばれる技術の進展により、環境や社会、個人や

ものの情報が簡単に入手できるようになっていくでしょう。まさしくビッグデータ時代の到来です。この大量データを分析し、価値を生み出し、実社会に還元していくことにより素晴らしい未来が開けるはずで、農業や漁業、林業に情報処理技術が取り込まれ、第一次産業が第六次産業として生まれ変わっていくことができるかもしれません。これにより地方創生が実現し、少子化問題にも歯止めがかけられるかもしれません。これらは単なる夢物語ではなく、実現可能な未来予測です。しかし、そのためには情報処理技術が今のままでは実現できません。アカデミアによる基礎研究の深堀り、システムアーキテクトによる構想展開、異分野、特に社会科学系を交えた知見との融合、そして国や産業界による大規模システムの実証が不可欠です。予想されるセキュリティの問題や、モラルの問題の解決、価値観の異なる人々との間でのコンセンサスの形成といった難問も避けて通るわけにはいきません。

今、日本では成長戦略が強く叫ばれ、産業界もこぞってイノベーションの実現を目指しています。そのためには情報処理技術の役割は重要です。そして真の成長戦略のためには、人口減少への歯止めや、エイジング社会への対応、安全な社会インフラの形成といった社会問題の解決もまた不可欠であり、そこにも情報処理技術のなすべきことがあります。そして日本の問題だけにとどまらず、課題先進国としての日本の取り組みがグローバルな展開を図ることで、世界の人々の役に立つことを目指していくべきでしょう。

取り組むべき課題

以上の視点を踏まえ、本会として取り組むべき事項は、魅力のある学会を目指して中長期的視野で学会のさらなる活性化を実現していくことです。2015年度事業計画でも述べている通り、これまで、推進してきた学会の抜本的改革を継続し、中長期戦略の策定、若手アイデアの実現と小中高生にまで範囲を広げた会員制度の拡充、研究会による諸活動の推進と社会への提言・情報発信、グローバル化、会員サービスの拡充を実現してまいります。論文誌のインパクトファクター（IF）取得と採録論文

数の増加を推進し、学会の価値を高めていくことが時間のかかることかもしれませんが基本であると考えます。短期的な止血には限界があり、長期的視野で魅力のある学会を作っていくことが実は何よりも近道です。このことを私自身は企業経営を通じて経験してきました。また、学会が長期的に強くなっていくために、基礎体力としての「収支改善」にもしっかり取り組みます。

学生の情報離れが危惧されています。ICT (Information and Communications Technology) はあらゆる分野に広がる可能性を持った魅力ある学問であることを強くアピールし、学生の情報離れを阻止していきたい。最近では、情報処理を単なるツールと見なして、新たな研究分野が少なくなったように見る意見もありますが、まだ解決すべき課題も多く、研究分野としても未知の領域は限りなく存在しています。むしろ今だからこそ、情報処理分野が再度、脚光を浴びる時期にきているとも言えるでしょう。真の意味で、人の役に立つために情報処理技術がなさなければならぬことは山積みです。まさしく学問としても、技術としても、テーマの宝庫です。

すでに、述べてきたとおり、情報処理技術は情報処理業界だけのものではなく、それを活用して変革を目指す他業界の人を含めた大きな取り組みに広がっていき、真に社会や人の役に立つ価値あるものになっていくと考えます。本会といたしましても、他学会とのコミュニケーションが重要で不可欠であり、このことを意識して取り組んでいきます。自由闊達な議論が、分野を越えて、アカデミア、産業界の枠を超えて、世代を超えて、さらに国境を越えて、当たり前のこととしてできるように、そして本会がそうした場を提供し、その中心になって活動していけるような存在になることを目指してまいります。会員の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(2015年4月15日)

富田達夫（正会員） tomita.tatsuo@jp.fujitsu.com

1972年東京大学理学部物理学卒業、1973年富士通（株）入社、情報機器開発に従事。同社経営執行役、経営執行役常務、取締役副社長を歴任。2010年（株）富士通研究所代表取締役社長、2014年同社取締役会長に就任し現在に至る。2015年静岡大学大学院自然科学系教育部情報科学専攻博士課程修了。情報学博士。日本経済団体連合会産業技術委員会企画部会委員。